

## Passivの本質について (その一)

その他のタイトル	Zum Wesen des Passivs : 1. Teil
著者	寺川 央
雑誌名	独逸文学
巻	19
ページ	105-120
発行年	1974-04-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00017833">http://hdl.handle.net/10112/00017833</a>

# Passiv の本質について (その一)

寺 川 央

Passiv の問題についても、近年もっとも詳細にこれにとりくんだのは一般にみとめられているように<sup>1)</sup>、恐らく Leo Weisgerber であろう。彼は J. Wackernagel が 1861 年に、「Passiv を自然に Aktiv に平行している形とみるのではなく、そのかわりに、Passiv というものの存在を本来はへんなものだと思ってもらいたいのだ」といいながら、さらにまた「Passiv が言語の浪費 (Luxus) とよばれているのはもっともなことであって、それというのも受動の文は、正常な能動文の裏がえし (Umkehr) をしめすにすぎないのだ」<sup>2)</sup> とつづけているのを引用し、この Luxus とは何であり、また正常な能動文の Umkehr とは何なのかを問うことから始めて、Passiv の精神的な機能を追求しようとしたのであった。つまり 1963 年に「Passiv の中にある世界」Die Welt im Passiv<sup>3)</sup> と題する長編の論文を書き、さらにそれを同年の彼の代表的な著書の一つである「言語研究の四段階」Die vier Stufen in der Erforschung der Sprachen の中で、Die täterabgewandte Diathese, zum indogermanischen Passiv として敷衍しているが<sup>4)</sup>、いわゆる Passiv については、このときまでにすでに約百年間、インドヨーロッパ諸語に関してその形態の歴史的な研究の数々の成果がえられるとともに、やはりその内容的機能的な理論上の位置付けをめぐるでも、ギリシヤ語の Pathos の解釈にはじまり、それを動詞の Leideform として翻訳した考え方に至るまで、さまざまな論議がかわされてきたのであった。しかしそこから得たものといえれば、たとえば 1961 年に公けにされた H. Ammann の遺稿にみるような

まさに否定的な意味での共通性にすぎなかった。すなわち、「Passivum=Leideform」というあらわし方が事実に適合しているのかどうかについては、受動的な表現に関する諸問題を原則という観点から論究しているほとんどすべての研究が、異論をたてているのである。<sup>5)</sup>」たしかにこの領域での問題点の一つは、つまりいわゆる行為の形式 Tätigkeitsform としての Aktiv に対するこの受忍の形式 Leideform としての Passiv に関するものであり、他の一つはまたこの Aktiv-Passiv の Konverse, Umkehr をめぐるものであった。

そもそも Aktiv を Tätigkeitsform とし、Passiv を Leideform とみる考え方は、すでに以前から多くの文について矛盾することが指摘されている。たとえば er wohnt in Hamburg は、行為 Tätigkeit とはみられないし、er wird gelobt はまた苦しみ Leiden をあらわすものでもない。さらにまたこうしたらえ方では、いわゆる非人称受動 unpersönliches Passiv を把握できないこともあきらかである。ところでこの Leideform としての Passiv という考え方には、すでにかなり以前から動詞の性を行為 Handlung, 事象 Vorgang, 状態 Zustand という概念にわけようという意見が対立していた。たとえば 1922 年から 1926 年にかけて Karl Voßler と Meyer-Lübke の間に討論がつづけられたことはよく知られているが、この Passiv を Leideform とみるロマンス語学者の Voßler に対して、Passiv が Tätigkeit をあらわす Aktiv とは反対に、一つの状態 Zustand もしくは一つの事象 Vorgang を表現すると考えたのが Meyer-Lübke である。「つまり事象と状態は、行為に対立するものであって、その二つの間にはきわめて緊密な親近関係をもっている。なぜなら状態というのは、大ていの場合その事象の継続であるか、またはその結果なのだから。しかしもし Passivum が, Aktivum の反対であるのなら、Passivum は事象もしくは状態をあらわすのだといってもよいであろう...<sup>6)</sup>」

現代の文法のうちで、こうした考えをもつとも徹底しているのは、K. Brinker によれば<sup>7)</sup>、Schulz・Griesbach ということになる。つまり、「能動の文は、行為、事象もしくは状態をあらわす。werden-Passiv は、一つの行為を事象としてあらわす文法上の手段である(Vorgangspassiv)。一つの事象の結果、つまり到達された状態があらわされるときには sein-Passiv (Zustandspassiv) が用いられる。<sup>8)</sup>」

sie öffnete die Tür が行為であり、die Tür wurde geöffnet が事象であり、die Tür war geöffnet は状態をあらわすものとみるのだが、こういった行為、事象、状態という諸概念のはっきりとした区別そのものが依然としてむつかしいのだから、このうち状態 Zustand だけが、客観的にみて行為 Handlung と事象 Vorgang から区別され、後二者のちがいかかなり主観的な領域の中にあるようだとする Helbig の意見<sup>9)</sup>が先ず先ずここでは当をえたものであろうか。

Hans Glinz もまた、はじめに徹底してその形式面から出発しているが、その「ドイツ語の内的形式」Die innere Form des Deutschen (1952年)の中では、Aktiv と Passiv の二分説に対して、(haben), werden, sein をともなう構造形態という三元性にあわせて、„einfach“, „bewirkt“, „gegeben“という内容をもった出来事の様式 Geschehensarten を三つ設定するのである<sup>10)</sup>。tätig ということばにあたるいわゆる „einfach“ とちがって、werden-Passiv は自発的ではないから „bewirkt“ としてとらえられて外からの力がそこにひきつづいて供給されるのであり、sein-Passivは効果を与える力がその背景にしりぞいて結果だけが „gegeben“として把握されるのである。Weisgerber はこの意見に対して、Glinz が根本では音韻と内容がつよく平行していることを予期していることを指摘して<sup>11)</sup>、この三つの Geschehensarten が十分その根拠をもったものなのか、そしてまた bewirkt と gegeben とは結局は同じ Geschehensart の内部でのアスペクト的なちがいではないだろうか、そして正常なあつかい

方の反対方向として、いわゆる Umkehrung としてとらえる昔から知られたあの考え方を、さらに一層徹底して問題にしなくてもよいのだろうかと問いかけている。「Leideform として Passiv をうけとめる考え方がそこに感じとられるような、いわゆる Betroffenwerden という表現よりも正当と思われる」<sup>12)</sup>と Brinker が、みているのは当然としても、Weisgerber がいうように<sup>13)</sup>、ここに非人称受動が含まれない点については、この bewirkt というその内容が問題なのであろう。

さて J. Erben が、「他動詞の自動詞化」Intransitivierung eines transitiven Verbs<sup>14)</sup>、つまり受動文の中でその Objekt の果す役割が変わることをその決定的な機能とみて、観察方法と表現方法の転換を指摘しているのに対して、Weisgerber は、この考え方にしたがうといゆる Passiv とともに、Erben のいう Varianten des Passivs<sup>15)</sup> にもあてはまることから、「たしかに斬新な考え方」であるとしながらも、他動詞化というとらえ方だけでは Passiv 構造のすべて、たとえば自動詞の受動形のすべてをつくしているとはいえない点を指示して、むしろ Passiv を die täterabgewandte Diathese und Sehweise と規定し、つまりはあらゆる受動的な、そして受動に類似した取扱い方法には、共通して「行動する行為者としての主語が排除されていること」die Ausschaltung des agierenden Täter-Subjekts<sup>16)</sup> があり、むしろ「主語の精神的に果す役割」の中に Passiv の問題を解くかぎを求めようとし、そして ein täterabgewandtes Passiv と、ein täterbezogenes Aktiv との対立の中に、その基本的な Opposition を看るのである。

そこで Aktiv と Passiv というのは、客観的にちがうカテゴリーなのか、それとも主観的に区別のできるものなのかという問題がでてくる。たしかに Glinz が「出来事の様式」Geschehensarten といひ<sup>17)</sup>、W. Admoni がその「ドイツ語の構造」Der deutsche Sprachbau の中で「行為の形式」Handlungsformen とよび<sup>18)</sup>、W. Schmidt が「行為

の方向」 Handlungsrichtung と名づけているのは<sup>19)</sup>、そこに客観的な判断の基準を看取しているからであり、Weisgerber や、そして Duden-Grammatik の場合には、それを主観的なものと観じて、客観的には同じ出来事をことなつた観点からとらえているのだとする。Helbig は、このことについて、Aktiv と werden-Passiv のときには、その問題になっているのはたしかに客観的な現実の中にある同じ事態なのだが、そのみている方向が異なっているのであって、この二者に対して sein-Passiv の場合には、客観的・事物的に相違があるのだという。「なぜなら、この状態受動は、プロセスをあらわすものではなく、一つのプロセスの結果としての状態を表現しているからである。<sup>20)</sup>」つまり Aktiv と werden-Passiv のちがいは、出来事に対する主観的な見方がことなる点にあって、Helbig は、この二つに sein-Passiv を加えた「動詞の三つの性」 drei Genera des Verbs を、客観的な徴表としての ± Prozessualität (経過性) と、主観的な徴表としての ± Agenzzugewandtheit (動作の主体への指向性) によって区別しているのである<sup>21)</sup>。

さて一方、Passiv を Aktiv の「裏返し」Umkehrung とみる考え方は、Duden<sup>22)</sup> をはじめ、M. Regula<sup>23)</sup> や、W. Schmidt<sup>24)</sup> にも一般に見られるようであるが、Weisgerber は、このことはいわゆる「他動詞」にだけあてはまることであつて、Passiv の多くの場合には、Aktiv のときにあつた主語の存在がまったく消えてしまっているという事実からすると、このように問題をせばめてしまうのはゆるされないと<sup>25)</sup>。とすればつまりは、Aktiv のときはその主語が、そして Passiv のときには Aktiv のときの目的語が、その都度その行為を観察する視点になるのである。Duden も、他動詞をもつた文の中では、Aktiv においては行為がその主語から出て目的語のところまで完成するが、一方 Passiv では、この目的語が主語になることに注目している<sup>26)</sup>。そして同時に、さきの能動文の主語は、von という前置詞をともなつてその出来事の Urheber と

してあらわされるのであり、この出来事がそのときにはつまり受動文の主語のところで成就するのである。すなわちそこに「行動の方向の完全なうらがえし<sup>27)</sup>」がみとめられる。しかしこうした転回には、「他動詞であること」と「動作主体がはっきりとあらわされていること」という制限がついているのだから、いずれにせよ能動的な構造から、受動的な構成へと機械的に変換することはほとんど不可能である。そこで Admoni は、伝達という立場からすれば、三元的な受動構造、つまり動作の主体がはっきりとあらわされた受動でも、それに対応した能動的な構成とくらべてみると、その意味内容は同一ではないというのであり<sup>28)</sup>、また Els Oksaar もごく最近の論文でこれを実証している<sup>29)</sup>。しかし、Brinker は事物に即したコミュニケーションという観点からは、どうしても Aktiv と werden-Passiv の等価性をみとめなければならないとするのであって<sup>30)</sup>、このどちらをえらぶかは、Welke のいうところに従って<sup>31)</sup>、文体論的な観点にゆだねている。そこでこうした文体上のちがいをあらわすのに「機能的なパースペクティブ」die funktionale Perspektive<sup>32)</sup> という考え方をういたのが Helbig であるが、この方法も主語が文頭にあるような時には、あの rhema-thema の位置の移動がみられるだけにすぎず、さまざまな語順がゆるさされるという点からみると、これを文のタイプの区別にまであてはめるのはむづかしいようである。

さて、最近での Passiv の領域における研究書として注目されているのが、すでに引用してきた Klaus Brinker の「現代ドイツ語の Passiv, その形式と機能」Das Passiv im heutigen Deutsch, Form und Funktion (1971年)であるが、彼は、Passiv のもつ内容的な課題から出発した Weisgerber と同じように、先の Ammann のことばを引用しながらも、従来の Passiv 研究の出発点が大い内容の観点からなされていて、Passiv という概念のもとでは、ある一定の形態論的な、シンタクスの観点からみた動詞の体系、すなわち主として werden+Part. II および sein +

Part. II がとらえられていることを述べ、しかもその前提として形式と意味との原則的な一致をその確認しないままにうけいれていることをも指摘した上で、いわゆる内容中心の解釈を拒否して、厳密にその表現の側から出発しようとしている。すなわち「Passiv というこの用語は、当面の研究の中では、もっぱら形式の上で定義した動詞的構造に関するものであって、それはそうした構造が、他の動詞的構造に対して一定のシンタクスの関係にあるときにかぎられている。Aktiv と Passiv は、つまりこうした定義においては何ら絶対的なものではなくて、ただ相互に対立して限界づけをしあうことだけで存在するにすぎない。<sup>33)</sup>」

たしかに Lutz Götzte のいうように<sup>34)</sup>、こうした相関的な規準の中には、従来からする Aktiv-Passiv-Konverse はふくまれていない。したがって Aktiv と werden-Passiv が、事物に即したコミュニケーションという点で、Aktiv と sein-Passiv との関係よりはずっと近い位置にあることはみとめながらも、ここにある変換関係をそのシンタクスの面にかぎってみとめ、またそれ自体、いわゆる他動詞と werden-Passiv にかぎっている点は適切であろう。

ところで Brinker は、Weisgerber の Passiv 論に対する批判として次のようにのべている<sup>35)</sup>。「しかしながら、こうした定義では Passiv に入るとみられるものの範囲が非常にひろげられる。いわゆる人称受動の形式 (werden・sein+Part. II をともなうシステムの形式) と、非人称受動構造の中には、たとえば再帰的な方法によるもの (die Tür öffnet sich), さらにそればかりか能動的な man 構造をもった文までが加わってくる。」そしてまたこの Täterabgewandtheit という内容的な観点かとにかくあまりにも性急に、きわめて種々様々な動詞的な構造をまとめてしまっていないか、さらにまた他面こうした定義づけでは sein-Passiv を完全に正確には把握できないのではないかという点を指摘して、とくに後の問題では、täterabgewandt な叙述形式をとることができるかどうかは、sein-Passiv

をえらぶのにむしろ第二義的な役割しか果たしていない点をあげてその理由にしている<sup>36)</sup>。

最近よくこの sein+Part. II, つまり Zustandspassiv の文法的教授法的な説明が方々でとり上げられているのは<sup>37)</sup>, この後者の問題につながっているように思われる。そしてはじめの点, つまり Brinker の批判しているその受動の範囲がひろがりすぎるといふ点と関連して, 彼がその著の中で, werden-Passiv の syntaktische Varianten<sup>38)</sup>, すなわち従来の伝統的な研究の中ではもっぱら受動の代用形という概念に包括されていた Variante des Passivs をあらためてとり上げていることに注目したい。

彼の規定したこの概念は, たしかに「受動的な見方を表現するその他の可能性」(Duden-Grammatik) でもなく, また「受動の意味をもった能動の形式」といった内容的な観点からではない。たとえば, werden-Passiv とは述部の形態がことなっていることと, その述部は werden-Passiv 乃至は Aktiv の中で述語を構成している同じ動詞の形式や同じ動詞のつながり方をしてしていること, その Variante と werden-Passiv の述部がたがいに意味論上の基本関係をかえずにとりかえられることなど<sup>39)</sup> といった全く形式的な観点に立つものである。そして Duden-Grammatik のあげている andere Möglichkeiten, Passivische Sehweise auszudrücken のうち, bekommen+Partizip II や sein+zu+Inf. そして lassen+sich+Inf. が werden-Passiv の Varianten とされ, werden-Passiv と sein-Passiv とならんで人間以外の主語をもった再帰動詞, さらに die Suppe kocht のタイプも Passiv の中にいれている<sup>40)</sup>。そして man-Form のつくれる動詞および動詞の表現, そしてもっぱら人間外の主語をもった動詞および動詞的表現は, 中立的な残りのグループに入れられているのである。それでは, 伝統文法において, ふつう werden-Passiv を二分していた他動詞の Passiv, いわゆる人称受動 persönliches

Passiv と、自動詞の Passiv, いわゆる非人称受動 unpersönliches Passiv は如何かといえば、つまり Brinker のいう W I のタイプ (er wird von mir geschlagen—ich werde verfolgt) に対して、W II のタイプ (dir wird von ihm geholfen—für Arbeit wird gesorgt) と W III のタイプ (von uns wird gearbeitet—es wird getanzt) が対立することになる<sup>41)</sup>。

つまり A) der Freund wurde unterstützt と、B) dem Freund wurde geholfen と、C) es wurde gearbeitet の三つにおいて、B) と C), もしくは C) だけが非人称 Passiv とみられるのかという問題にも関連してくる。Helbig は、この場合、C) のタイプは、その一般化された意味と、その内容の aktiv な点で A) や B) とちがっているが、Brinkmann や Glinz の示唆するように、個々の格が一定の不変の内容をもっているという考え方を放棄して J. Fourquet のいう<sup>42)</sup> 現代ドイツ語の中での格の相対的無内容性から出発するならば、A) と B) とのちがいは、ただシンタクスのなものにかぎられていて、そこに意味論的な理由づけを欠くものと見る<sup>43)</sup>。Weisgerber は、これとちがって、このいわゆる非人称 Passiv を彼の形態中心の観察方法でとらえようとするときには、やはり H. Brinkmann がその品詞論を展開するにあたって区別した「動詞の層」Verbschichten という考え方をその手がかりにしようとしている<sup>44)</sup>。彼は先ず、「行為動詞」Handlungsverben のときには、すでに能動的な man-Formen との対応が見られ、たとえば man kauft : es wird gekauft となり、見かけだけからするならば es werden Waren aller Art gekauft という形もできる。こうしたふつうなら余り注目されないような現象も、特にフランス語において議論の多い on-Passiv を考えると重要になるのだが、ドイツ語では次のような意味で考えられなければならない。

つまりこのような非人称受動は、他動詞が作為動詞 Beschäftigungs-

verb として、通常もっている対格の目的語なしで出てくるときにかぎってつくられる。(man kauft drauflos : es wird drauflos gekauft) そしてこれが完全な「行為動詞」としてあらわれる時にはこの es-Formen の意味もちがってくるようになる。(man kauft Brot : Brot wird gekauft : es wird Brot gekauft) つまり内容からみるとこれはもう Weisgerber のいう Diathese というよりは Aspekt の問題である。つまり複数にすれば es werden Brote gekauft となるからであって、だから本来の非人称 Passiv は、自動詞のときに種々のニュアンスであらわれ、「活動動詞」Betätigungsverben のときには man klopft : es wird geklopft であり、「変動動詞」Veränderungsverben のときには man geht : es wird gegangen となってくる。ただ kommen と gelangen は man kommt となっても es wird gekommen とはならない。いわゆる「状態動詞」Zustandsverben の場合には、もちろんその受動的な形式と内容の一致があるかどうかの問題になるにしても、これはこの非人称受動の本来の領域なのであって schlafen から man schläft そして es wird geschlafen となる。しかし、man blüht というときはほとんどありえないし、es wird geblüht とはたしかにいえぬように、man-Form のとれないときには非人称受動もできないことになっている。さらに Weisgerber の記述にしたがえば、Brinkmann のいう「出来事の動詞」Geschehensverben では、三人称で物の主語を伴ってあらわれることはあっても、一般的に Passiv はできない。またいわゆる非人称動詞の気象天候をあらわすものや、状態をあらわすものは非人称受動がつけられるし、一層独特なものとしては haben と sein があり、ich habe から man hat とはなっても ich werde gehabt と、es wird gehabt ともならない。sein は man ist はあっても es wird gewesen がない。werden や scheinen もこうした点で同じということになる<sup>46)</sup>。

さてこのように形態中心の観察にもとづいて得た結果を用いて Passiv

のもつ内容的な特性を考える時に、Passiv をつukれない動詞がとくに問題になる。つまり man-Sätze がつukれないときというのがその限界になっていたのであって<sup>47)</sup>、また非人称動詞では、もともと行為者を強調しているのではないのだから Passiv をつukる必要がないことがわかる。

結局 sein や haben を Passiv にできないのも、いわゆる sein-Perspektiv と haben-Perspektiv からくるのであろう<sup>48)</sup>。ところで man-Formen は、その見方と構成からするといつも能動的であって、Brinker がこれを Passiv にいれないのも当然であるが、それにもかかわらず受動的な感じが度々するのは、そうした man-Formen の時には、明示された行為から何らかの距離をおいているからであろうか、これが Passiv に一番ちかい関係に立つのは他動詞でない動詞のときであって、その場合には人称的な動作の主体があってもそれをぜひ置かねばならぬ理由がうすく、そこで非人称の man によってそうした能動的な観念をはずし、非人称受動へ移行してゆく。つまり man tanzt は es wird getanzt となるのである。Weisgerber によれば<sup>49)</sup>、このような非人称受動が動作の主体もっていて、能動の形のときにすでに非人称的ではない場合には、どの種類の動詞からでもつukれる一番拡がりの大きい受動の形式であるという、ここで説明された Passiv の機能のとらえ方に対する傍証なのである。そして歴史的にみても、こうした非人称受動が人称受動のもとになっていたとされている。また非人称 Passiv においてはもちろん Leiden とか Affiziertwerden といった考え方も全く問題にされず、他動詞であっても非人称受動がでてくるのには目的語が全く関係していないことがその条件になっていて、非人称の es wird getrunken が man trinkt に対し、man trinkt Wein といえ、それは Wein wird getrunken という人称の Passiv に対してというのである。ところで Brinkmann は、自動詞は「人間もしくは生物の行為として把握されうる とき」にのみ非人称受動に用いるという<sup>50)</sup>。その他「受動は人間を行為者として設定してい

る<sup>51)</sup>」とか、「主語としての行為する生物<sup>52)</sup>」とか、「動詞の内容の実現化に主語が直接関与すること<sup>53)</sup>」といった意味論的な定義をされるが、これに対して Brinker は、こうした規定では、主観的な解釈の恣意にゆだねられているとみて、同じように、行為と事象の相違にも、また主語の能動性と非能動性の差異にも、乃至はまた動詞的な内容の実現化に主語がどの程度かわりあいをもつのかといったちがいでについても、このようなあいまいな意味論的カテゴリーを排除しようとする<sup>54)</sup>。彼は「受動の可能な動詞」と「受動の不可能な動詞」の区別を man-Transformation をつかって行なっている。つまり man-Form のできないいわゆる自動詞は werden-Passiv もできないのであって、たとえば \*man schmeckt jm. → \*jm. wird geschmeckt という風に展開し、多くの自動詞にはこの逆の場合もあてはまるがそれがすべてというわけではない。

つまり Brinker は man-Probe をすすめてゆけば、受動ができるかどうかという観点から man-Verben をすべて類別化し体系化することも可能であろうと考えている。

ところが「行為する動作主体としての主語を排除すること」を Passiv の基準にすえている Weisgerber からすれば、やはりこの man-Sätze もその täterabgewandte Diathese としての Passiv の中に包括されるのだが、Brinker では もちろんその Variante にも入らない。ただ彼は、別の箇所で、man sorgt für Arbeit が für Arbeit wird gesorgt と、また man tanzt が es wird getanzt というように、動作の主体はもちろん具体的にきめられていないが、おそらく生命をもった人間的なものであることをうかがわせている man 構造の Aktiv には、こうした同価性をもつ表現形式があって、したがって aktiv な man 構造と werden-Passiv の競合を指摘し、とくに「そればかりかその対等関係にある Passiv の構造よりも（この man 構造の方が）いいとされることがしばしばである<sup>55)</sup>」ことにもふれているのである。こうした対立を改めて仔細に検討

してゆくならば Form と Inhalt, その各々から厳密に出発してきた双方から, この man-Formen がいわば Zwischenglied (中間項) として注目すべき機能と位置付けをしめしている点に, この十年間の情報処理面からする進歩を背景としたいいわゆる gestaltbezogen な観察方法の充実をふまえながら, あらためてその上にとって, 内容的にも考究してゆく方向が見られるのではなからうか。さらに次回にその具体的な検討をつづけたい。

#### 注

1. z.B. Brinker, Klaus: Das Passiv im heutigen Deutsch, Form und Funktion, 1. Aufl. 1971 München S. 14
2. Wackernagel, J.: Über das Passivum, Abh. d. sächs. Ges. d. Wiss.; phil.-hist. Klasse III (1861) S. 449ff.
3. Weisgerber, L.: Die Welt im „Passiv“, in der Festschrift für Fr. Maurer (Die Wissenschaft von deutscher Sprache und Dichtung, 1963 Stuttgart S. 25—S. 59)
4. Weisgerber, L.: Die vier Stufen in der Erforschung der Sprachen, 1. Aufl. 1963 Düsseldorf S. 233—S. 261
5. Ammann, H.: Nachgelassene Schriften zur vergleichenden und allgemeinen Sprachwissenschaft, hrsg. F. Gschnitzer: Innsbrucker Beiträge zur Kulturwissenschaft, Sonderheft 92, 1961, S. 96
6. Meyer-Lübke, W.: Vom Passivum, in: Neusprachliche Studien (=Die neueren Sprachen, Beiheft 6, 1925), S. 161
7. Brinker: A.a.O. S. 13
8. Schulz, D. und Griesbach, H.: Grammatik der deutschen Sprache, 4. Aufl. München 1966 S. 59
9. Helbig, G.: Zum Problem der Genera des Verbs in der deutschen Gegenwartssprache, in: Deutsch als Fremdsprache 5, 1968, H. 3, S. 131
10. Glinz, H.: Die innere Form des Deutschen, Eine neue deutsche Grammatik, 5. Aufl. Bern 1968 S. 372 u. S. 382
11. Weisgerber: Vier Stufen S. 244
12. Brinker: A.a.O. S. 14
13. Weisgerber: Vier Stufen S. 245
14. Erben, J.: Abriß der deutschen Grammatik, 9. Aufl. München 1966 S. 41f.

15. Erben : A.a.O. S. 43f.
16. Weisgerber : Vier Stufen S. 247
17. Glinz : A.a.O. S. 381
18. Admoni, W.G. : Der deutsche Sprachbau, 2. Aufl. Moskau-Leningrad 1966 S. 177
19. Schmidt, W. : Grundfragen der deutschen Grammatik, 3. Aufl. Berlin 1967 S. 201
20. Helbig : A.a.O. S. 132f.
21. Helbig : Ebd.
22. Duden-Grammatik der deutschen Gegenwartssprache, 2. Aufl. Mannheim 1966 S. 106
23. Regula, M. : Grundlegung und Grundprobleme der Syntax, Heidelberg 1951 S. 119
24. Schmidt : A.a.O. S. 202
25. Weisgerber : Vier Stufen S. 249
26. Duden : A.a.O. S. 106
27. Duden : Ebd.
28. Admoni : A.a.O. S. 178f
29. Oksaar, E. : Betrachtungen im Bereich des Passivs, in Festgabe für P. Grebe, Teil 2, Linguistische Studien VI Düsseldorf S. 165—S. 172
30. Brinker : A.a.O. S. 16
31. Welke, K. : Untersuchungen zum System der Modalverben in der deutschen Sprache der Gegenwart, Berlin 1965 S. 91
32. Helbig : A.a.O. S. 133f
33. Brinker : A. a.O. S. 25
34. Götze, L. : Besprechung über „Das Passiv im heutigen Deutsch“ Brinkers, in : Zielsprache Deutsch 2—1972 S. 89ff
35. Brinker : A.a.O. S. 14 ; auch Weisgerber, Vier Stufen, S. 247
36. Brinker : Ebd. 37. Vgl. z.B. Helbig/Kempton : Das Zustandspassiv, 1973 Leipzig, und Helbig, G. : Probleme der deutschen Grammatik für Ausländer 1972 Leipzig S. 47ff
38. Brinker : A.a.O. S. 117 ff
39. Brinker : A.a.O. S. 118
40. Brinker : A.a.O. S. 129
41. Brinker : A.a.O. S. 35 Vgl. Götze : A.a.O. S. 90
42. Fourquet, J. : Strukturelle Syntax u. Inhaltbezogene Grammatik, In : Sprache—Schlüssel zur Welt, Festschrift für L. Weisgerber, hsgb. v.

- H. Gipper. Düsseldorf 1959, S.140f
43. Helbig : Probleme S. 46
  44. Brinkmann. H. : Die Wortarten im Deutschen, in : Wirkendes Wort I 1950 S. 65ff
  45. Weisgerber : Vier Stufen S. 240
  46. Weisgerber : Ebd.
  47. Weisgerber : Vier Stufen S. 251
  48. Brinkmann, H. : Die haben-Perspektive im Deutschen, in : Sprache — Schlüssel zur Welt 1959 S. 176—S. 194 : und Rupp, H. : Zum deutschen Verbalsystem, in : Sprache der Gegenwart. Bd. I, Satz und Wort im heutigen Deutsch, Düsseldorf 1967 S. 148—S. 164
  49. Weisgerber : Vier Stufen S. 254
  50. Brinkmann, H. : Die deutsche Sprache. Gestalt und Leistung, Düsseldorf 1962 S. 218
  51. Admoni : A.a.O. S. 180
  52. Duden : A.a.O. S. 107
  53. Hartung, W. : Die Passivtransformationen im Deutschen, in : Studia Grammatica I, 3. Aufl. Berlin 1966 S. 110
  54. Brinker : A.a.O. S. 66
  55. Brinker : A.a.O. S. 145 Anm. 202.

## Zum Wesen des Passivs

### — 1. Teil —

Nakaba Terakawa

Wie viele meinen, gehört heute schon die Auffassung des sogenannten Passivs als der Leideform der Verben, der das Aktiv als die Tätigkeitsform gegenübersteht, völlig der Vergangenheit an. L. Weisgerber, der sich in neuerer Zeit wohl am ausführlichsten auch mit dem Bereich des Passivs beschäftigt hat, lehnt

ebenfalls die Bestimmung des Passivs als einer Leideform ab, sucht den Schlüssel zum Passivproblem in der geistigen Rolle des Subjekts, im Gegensatz zu J. Erben, der die veränderte Rolle des Objekts im Passivsatz für das eigentlich Entscheidende hält, und betrachtet die Ausschaltung des agierenden Täter-Subjekts als das Wichtigste der passivischen Verfahrensweise und die täterabgewandte Diathese oder Sehweise als eine Reaktion gegen die vorherrschende täterbezogene. Kürzlich hat K. Brinker in seinem Buch diese Bestimmung Weisgerbers kritisiert und hebt zwei fragwürdige Punkte hervor: Die grenzenlose Ausweitung des Bereichs dessen, was als zum Passiv gehörig betrachtet wird, und die Nichtberücksichtigung des sein-Passivs.

Daher ist sein Ausgangspunkt also eine recht detaillierte Auseinandersetzung mit der bisherigen Forschung und die Ablehnung inhaltbezogener Interpretationen, die ihren Niederschlag in Termini wie täterbezogene und täterabgewandte Diathese oder Vorgangspassiv und Zustandspassiv finden. Er geht streng von der Ausdrucksseite aus und unterscheidet konsequent zwischen „werden+Part. II-Gefüge“ auf der einen und „sein+Part. II-Gefüge“ auf der anderen Seite. Unter diesen beiden Forschungsrichtungen scheinen uns vor allem die Behandlungen der man-Gefüge bemerkenswert. Weisgerber schließt sie in seine täterabgewandte Diathese ein, während Brinker in negativer Weise die man-Transformation nur für eine Abgrenzung von „passivfähigen“ und „nicht-passivfähigen“ Verben hält. Diese man-Form müßte als Zwischenglied der beiden Forschungsstandpunkte eine entscheidendere Rolle spielen, könnte man vielleicht sagen. (Fortsetzung folgt)